

令和6年度第2回長崎原爆資料館運営審議会議事録

【日時】 令和6年11月18日（月曜日）10時30分～12時15分

【場所】 長崎原爆資料館地下1階平和学習室

【議題】 1 報告事項

ワークショップの実施結果について

2 協議事項

長崎原爆資料館展示更新基本設計（案）の中間報告について

【審議結果】

1 報告事項

ワークショップの実施結果について

- ・事務局より説明
- ・質疑内容

委員

小学生が C コーナーを素通りするということが多いので、小学生をターゲットにしたワークショップを実施するというのが前回の話だったと思います。しかし、今のご説明では、そういったターゲットに対しての効果、今回のワークショップでこういう効果があったという話が一切なかったもので、その点について説明してもらえませんか。

事務局

事前の資料館見学時に、それぞれの展示コーナー毎に評価の星を付けてもらいました。星が3つの箇所は小学生の皆さんの興味があるところ、逆に星が1つの箇所は小学生の皆さんがあまり興味のないところ、といった形で整理しました。その中でやはり、核弾頭数の模型などの評価が高かったです。今後実施設計に反映していきたいと考えています。

委員

なぜ城山小の子どもたちかという、他県の子どもたちにも案内をしたりして知識のある子どもたちということで選ばれたと思うので、もう少しフォローアップというか検証して、子どもたちの指摘事項をどう生かすのか、せっかく実施したのでもう少し具体性を出すといいと思います。

委員

いろんな立場の方の意見があると思います。長崎大学のワークショップの中で留学生が参加との説明がありましたが、日本人ではない方が展示見学の際にどのように感じられたのかというのは、重要なポイントだと思います。個人情報の問題があるので、誰がどのような発言をしたか、までは出せないかと思うのですが、特に留学生からどういう意見があったのかについて、もしもわかる範囲で教えていただければありがたいです。

事務局

長崎大学の学生さんはアジアの方が多かったのですが、やはり多言語化の話が出ました。いろいろな方に対して説明できるようなものがあればいいとか、デジタル技術を活用した展

示が外国の方にも分かりやすいのではないか、というご意見がありました。

委員

P11 に、「日中戦争と太平洋戦争のコーナーを継続し、分かりやすく解説する」とありますが、もう少し詳しく説明してください。

事務局

これは、一般公募の方にご参加いただいたワークショップで出されたご意見をピックアップしたものになります。グループワークをした中で、今、日中戦争と太平洋戦争のコーナーがありますが、継続してもっとわかりやすく説明してはどうか、といったご意見があったということです。

委員

ということは、まだ具体的にこういうことをという構想は、資料館としては、あるのでしょうか。

事務局

基本設計案の説明を後程行いますので、その中で説明いたします。

会長

修学旅行では見学時間がトータルで 40 分くらいとかで、細かい説明文を読む時間が無いのではないかと思います。QR コードを撮影すると持ち帰ってから読めるようになるのでは、といった意見はありましたか。

事務局

QR コードのことは、ワークショップでもご意見が出ていました。今回多言語化を進める一つの手法として、QR コードの読み取りというのはありますので、その辺は今後詳細に検討していきたいと思います。

委員

ワークショップ 3 回のファシリテーターとして関わった立場から一言申し上げます。ワークショップのプロセスややり方は、もっと改善していくことができると思います。ただ、全体としてやはり、リニューアルに留まらず、資料館に関わる方法として、子どもたちを含めた市民が、自分たちが一緒に作っていくという機運を高める、資料館は自分たちのものなのだという意識を作っていくのに非常に有効な手段だと改めて感じました。

まったく同じ形でなくても、長崎の一つの継続的なシステムとして、市民参加で資料館に関わっていく取組みは、何らかの形で続けられればということを非常に強く感じました。

委員から以前、資料館や美術館を市民が一緒につくっていくというのは日本では珍しいとうかがいましたが、しかし、長崎では夏の平和宣言も市民参加で高い評価を受けています。同じように資料館を自分たちのものとして、今後も市民が一緒にやっていく、というのを長崎市としても考えてほしいと思います。

会長

子どもたちの成長過程、発達過程に合わせて展示を考えていくことは大変大事です。

委員

市が行ったワークショップとは別なのですが。私が活動している写真資料調査部会では毎年写真展を行っていますが、今回新しい試みとして、夏のワークショップを実施したので、参考になればと思い、今日資料を配布しています。

写真展を行う前にボランティアガイドとして学生を集め、伝え方など考えてもらい、その上で、自分たちで企画して案内してもらいました。参加者は小学校高学年から大学生で 49 名。案内したお客さんは外国人も含めて 1 日 100 人前後。期間中には、どういう気づきがあったか、毎日アンケートをしており、その回答が 2 枚目のシートです。

子どもたちには、中高生や大学生が対応することは多かったのですが、学童の子どもたちや小学生の小さい子どもでも、しっかり理解しながら写真を見ていました。ただ写真の説明をするのではなくて、いろいろな見方、写っているものだけではなく背景の説明なども含めて、見る視点によって説明の仕方も変わっていくのだな、という感想を持ちました。

展示の仕方についてもいろいろな意見が出ました。爆心地からの距離、その写真が撮られた位置や時間などをもっと分かりやすくする必要があります。県外から来た人だけでなく、長崎に住んでいる人でさえ分からないことがあるので、地名や地理的な解説がもっと必要かなと思いました。あと「何倍」という説明も伝わりにくいことがある。いずれにしても今回の試みで、写真にまつわる背景などをきちんと伝えられるようにしたいと感じました。

リニューアル後に新たなガイドを配置するなど、ソフト面の計画の参考にさせていただければと思います。

会長

確かに、これまで資料館の中をガイドしながら歩くという視点はあまりなかったと思います。そういう視点からの意見が何かあれば後からでも教えてください。

委員

先ほどの質問と関連するのですが、具体的なことは決まっていないのでこれから検討していくという趣旨なので、それはそれで結構なのですが。

ただ、私は「日中戦争と太平洋戦争」の「太平洋戦争」というのは、正しい日本の歴史から見た場合に、原爆資料館の展示として使う言葉として果たして妥当なのかということに疑問を抱いています。「日中戦争」もそうです。日中戦争という言葉聞いたのは私が 30 代か 40 代の頃でしたが、私が子どもの頃は、「支那事変」といっていたのに「日中戦争」と言われている、意味が分かりませんでした。もう一つ、ここでは「太平洋戦争」と出ていますが、私が子どもの頃聞いたのは「大東亜戦争」だったのです。なぜ「大東亜戦争」が「太平洋戦争」になったのか、「支那事変」が「日中戦争」になったのか、意味が分からなかったのです。

私も関心があったので調べてみました。どうも様子がおかしいと今でも思っています。簡単に申し上げますと、「太平洋戦争」という言葉は昭和 20 年 12 月 8 日から始まりました。GHQ 提供の「太平洋戦争史」に出ており、全国紙はもちろん各都道府県新聞に全部出ているよう

なのです。長崎日日新聞も調べてみたら、コピーはもらえなかったのですが、確かにパソコンに入っていました。この「太平洋戦争史」という GHQ が書いた言葉が、ずっと戦後 80 年ですか、当たり前に使われています。しかし、まったく意味が違いますよね。「大東亜戦争」と「太平洋戦争」。今日は時間が無いので詳しくは申しませんが、もう一度この言葉の意味と使い方、「日中戦争」もそうなのですが、日中戦争の日は「日本」ですよね、中は「中華人民共和国」ですよね、「中華人民共和国」というのは 24 年に成立しているのですよ。日本と戦争できるわけがないじゃないですか。どうして「日中戦争」が罷り通っているのでしょうか。一回も戦争していないでしょう。24 年に成立した中華人民共和国と戦争したという「日中戦争」という言葉を使うのは妥当なのでしょうか。私はおかしいと思います。なぜ長崎原爆資料館でこの言葉が使われるのでしょうか、という話です。

これは習慣として一般的に使われている言葉ですので、原爆資料館だけが間違っているというつもりはありませんが、これは後々大きな問題を残すのではないかなと思っています。それから「太平洋戦争」もそうです。先ほど申しましたように昭和 20 年 12 月 8 日から GHQ が要望した、要望というか命令ですよ。これからは気づかれる方は、新聞を見てみてください。地方紙も全国紙も全部出ていますから。とんでもない話ですよ。日本が戦争をした「大東亜戦争」とは、趣旨も内容もまったく違います。今日まで自虐史観とかあるいは東京裁判史観とかいろいろ言われていますが、そういう考え方になっていって、実態と離れた日本人全体の歴史が、歴史観が出来上がってしまっているのではないかと思うのです。だからちょうどいい機会、見直しの時期だと思いますので、資料館の方とも一度じっくり話をさせていただきたいと思うのですが、言葉の使い方というのをもう一度考えていただきたい。今後、審議会でいろいろ議論になるでしょうから、その時にまた改めて話をさせていただきます。もう一つ申しますと・・・。

会長

今はその話をする時間ではないので、持ち帰っていただけますか。

委員

結構です。そういう意見があるということだけ話をさせてもらいました。この場でどうこうするつもりはありません。

委員

ここで議論するつもりはないというお話ですが、一点だけ訂正させてほしい。「日中戦争」の中は、「中華民国」の意味です。蒋介石政権下で戦争をしているので、それは別におかしくはないです。

委員

城山小学校校長です。子どもたちはワークショップをしていただいて大変ありがたいと思っています。現在の 5 年生の平和学習の起点になり、後日、追悼平和祈念館で講話を受けて、ますます学習意欲が高まっているという状況で、とてもありがたいことでした。展示については、大きくは 2 点、私にも思いがあります。

1点目は、やはり子どもたちは体感して思いが高まるということを今回非常に強く感じたところなのですが、広島に修学旅行に連れて行ったときに、6年間平和学習を積み重ねてきた城山の子どもたちでさえ、また怖いものを見ないといけないのか、という感想を言ったのだですね。これはいけないなと思ったのです。あまりに強烈過ぎると、学校に来ない子も出てきたような発達段階なので、そこを配慮しながらいけないかなと思っているところです。子どもの目線と大人の目線の高さが違うので、そういうところも加味しながら、展示の仕方を工夫されたらどうかと思います。また見学時間40分でさっと通り過ぎてしまうということですが、心に残るキャッチが大事なのだらうなと思います。本校の人権啓発月間の話をする、「ピースピース言っているだけじゃダメ、やらなきゃ」という言葉が出てきてドキッとしたのですが、子どもと先生方が話をしながら、そういうキャッチを出してきたんですね。これいいなと思ったのですが、こういうキャッチがどんどん出てくると印象に残るのではないか、というふうに思います。

2点目ですが、来館前にお勉強ができて、来館後もそれを継続できるような、長崎の資料館発の資料の提供。資料館のホームページからのダウンロード形式であればできるのかなと思います。特に長崎市の小学校5年生は全員、資料館に見学に来るのですが、ただ見学してお仕舞い、というのが多いかもしれません。そこで、見学の前後に、数時間続けてお勉強できるような資料をホームページからダウンロードできるようにする。資料は3種考えられます。一つは、平和に関する教育を数時間継続できるような資料学習カード、次に教師用の教育の展開例、そして平和ウォークができるような地図やクイズ形式の発問等がある学習カード。平和ウォークを軸にすれば、この資料館にも展示物はたくさんありますし、近辺には関連する場所がたくさんありますので、そこに行くと逆に資料館に戻るQRコードがあるというような資料の提供を併せてできれば、子どもたちにとってはすごくいい勉強ができると思います。

会長

ちなみに小学生は、何年生かで違うのでしょうか、スマホやパソコンでホームページを見るというのは、皆さんできるのですか。

委員

ICTクロムブックは1年生から6年生まで全員1台持っています。段階でいえば中学年以上はQRコードを読みながら学習しています。教科書にもQRコードがたくさんあります。

委員

城山小学校と一般公募は、施設の見学とワークショップという形になっていますが、長崎大学は施設見学というのが入っていない。なぜ大学だけ、施設見学をしないでワークショップだけなのかなと不思議に思いました。写真も入ってない。説明してもらっていいのでしょうか。

委員

私の担当授業だったので、私からお答えします。まずこちらは大学の一つの授業で、2ヶ月半、授業自体15回あります。その中の課題として、全員でグループになって取り組むとい

う形になっています。大学生なので、全員が同じ時間に資料館見学をするという形はとらなかったのですが、ワークショップの前提として全員必ず見学しており、それに基づいて発表を行うという形になっています。従って写真はありますが、確実に全員が発表時までにグループワークとして資料館見学をしています。そこはご安心ください。

2 協議事項

長崎原爆資料館展示更新基本設計（案）の中間報告について

- ・事務局より説明
- ・質疑内容

委員

C コーナー「4 核兵器の脅威」のところは、これまで小委員会でも何度か申し上げていたことでもあります。なぜ核兵器がなくならないのか、というところが非常に重要なところです。現状の展示の「被爆の実相」というのはよく使われますが、にも関わらず「では、なぜ核兵器がなくならないのか」という疑問を持ったまま、来館者の方々は資料館を出られると思います。そこはやはり、国際政治と安全保障等の観点から、どうしてこうなっているのかという背景を説明するのが非常に重要だと思います。

「核兵器の脅威」というタイトルや「第一、第二、第三の核時代」は、私が小委員会で、今の核を巡る現状について発言したものではありませんが、現状を説明する枠組みでした。このままだと、なぜ、というところよりも現在の情報を提示するのがメインになってしまうかなと危惧しておりまして、なぜ核軍縮がなかなか進まないのか、というところの背景を説明する、例えば現状の国際システムではすべての国家は自国の生存を自分で確保しなくてはいけない、そうした国際システムにおいて国家間には不信感がどうしてもあるからとか、国際政治の権力闘争のために核兵器を保有するとか、究極の兵器を持つというステイタスや価値観とか、被爆の実相が伝わっていないとか、そういったところを説明することによって、核の脅威、歴史、そこで次に、なぜ核軍縮が進まないのか、を言ったうえで、次に「長崎の歩み」の今の市民の活動の紹介につなげていくことによって、市民の活動のあり方をなぜなくならないのかという文脈の中でもっと意識することができますし、どこが足りていないのかということも認識できる、というところで全体の流れができるのでいいのではないかと思います。そこは今後また議論していきたいと思います。

委員

委員の指摘は非常に重要だと思います。現在は、核廃絶の進み方が非常に緩くなっている、あるいは逆に核の軍備拡張が進んでいる、というようなひどい状況です。そのような中で今回、被団協のノーベル平和賞受賞があった。核兵器廃絶の平和宣言もあった。市民レベルで考えると、それなのになぜ、現実には核軍縮がぜんぜん進んでいないのか、といったところが分かる展示にするためには、今の委員の指摘されたことが非常に重要だと思います。ここは時間をかけて、ぜひ検討していただきたいと思います。

委員

C コーナーの最初の展示、現在は「日中戦争と太平洋戦争」となっていますが、それが「二つの世界大戦」という展示内容に変わってくると、日本の加害という面が薄くなるのではないかと危惧しています。そういった点で現在の展示内容は、維持してもらいたい。

特に、台湾、朝鮮を植民地にしていったことも書いていかなければならない。また、アジアの韓国や中国、東南アジアの人たちもたくさん来られていますので、その被害状況、例えば日本の戦争によって東南アジアで犠牲になった方が2,000万人と言われているわけですが、やはり国別の犠牲者の数などをちょっと入れてほしいなと思います。

それから、放射線の被害のところでは、内部被曝や残留放射線を入れていかなければならないのではないかと思います。現在、長崎市は被爆体験者という、被爆者が差別されている状況もあるわけですから、内部被曝の問題もやはり展示してほしいと思います。

それから、「長崎の歩み」の中では、高校生1万人署名運動や平和大使について、若い人たちがこれから先、平和活動に参加していくという面から見てもきちんと記述してほしいなと思います。

それから、ABCC、いくなれば、被爆者がモルモットとして研究されて、そして資料は全部アメリカに持っていった。被爆者がどんな苦しい病気になっても一切治療しなかったと、そういったこともあるわけです。あるいは、去年か一昨年、放影研の理事長がそのことについては謝罪をされましたが、そういったところをぜひ入れてほしいなと思います。

(※2017年放射線影響研究所の理事長が謝罪)

それから長崎の状況、やはり長崎は三菱の財閥の、軍需都市だったということもきちんと入れてほしいと思います。

委員

質問ではなく提案です。資料2の、2-8「放射線による被害」、2-9「救援救護活動」、永井博士のコーナーの縮小については、すでに小委員会でも議論したので、それでいいのですが。小委員会が終わった後、大分たってから気づいたのですが、救護活動の中に、浦上第一病院の秋月辰一郎先生の活動がまったく入っていない。原爆直後から3日間ぐらいい不眠不休で救援救護をやられた、そこにもものすごい数の被爆者が松山から上がってきて、爆心地——爆心地ということはその頃は分かっていたのですが——松山から近いところから亡くなっていくことに気づいた。その後書かれた著書『死の同心円』の最初の洞察がここで行われたのですが、それがぜんぜん入っていない。

もう一つ言わせていただくと、調来助先生が大学病院におられた最初の救護活動の最初のときから、浦上地区にある滑石ですかね、滑石の救護活動の運営をされていた。

この3つはあげておかないとちょっと不十分かなと思い、今日改めて提案させていただきます。

委員

参考資料2の「二つの世界大戦」の部分ですが、そこに今まではビデオが見られるような場

所があったと思います。あの映像が消えてしまうのであれば、ちょっと私は不満です。展示に書いていない部分が、展示だけでは表現できないような部分がビデオを見て理解できましたので。

それと、核開発が進んでいく中で、実験場やウラン採掘現場でたくさんのヒバクシャが、長崎の原爆以降にもつくりだされていますよね、そういう人たちの展示が消えてしまったのでしょうか。やはり映像や写真を残してほしいなと思います。それをしないと、「長崎を最後の被爆地に」という言葉が、長崎以降にも世界中にたくさんヒバクシャが生み出されていること、そういう人たちが手を取りあって、核兵器禁止条約などが生まれたのだと思うのです。その辺の充実をしてほしいと思います。

委員

この基本設計案では、中項目は4か国語で、小項目のタイトルは日本語・英語の2か国語で表記となっています。中項目には多分、展示内容の説明文があると思うのですが、小項目の展示手法としては、文章で説明するというのではなくて、すべてグラフィック、写真、図解など、目で見て伝える展示となるのでしょうか。

事務局

小項目にもそれぞれ解説文などが入りますので、そういった部分も含めてグラフィックを作成していきたいと考えています。

委員

わかりました。そういうことであれば、例えば、基本設計案15ページの大項目「二つの世界大戦」の中の小項目についていくつか。基本的に今の資料館の展示内容を引き継ぐということでしたので、「満州事変と軍部の台頭（※小項目3-2-1）」には、満州事変は関東軍による謀略だったことは教科書にもあるわけですが、そういう説明を入れる必要があると思います。「日中戦争の長期化（※小項目3-2-3）」には、「南京大虐殺」など、日本軍の戦争の実態をきちんと記述するということがやはり必要ではないかなと思います。以上、意見としてお伝えしておきたい。

事務局

様々なご意見をいただきました。展示の中身の詳細は、来年度、実施設計の中で決定していくことになるかと思いますが、今日いただいたご意見はその際の参考に作成していきたいと考えます。

個別でいいますと、「放射線」の部分でいえば内部被曝や秋月先生の紹介などですね。「二つの世界大戦」の部分では日本の加害のビデオの継続をということでしたが、基本的には今回全部入替をするのですが、どういった映像を使うのかというのはまだ今の段階では整理ができていませんので、そういった部分も含めて今後検討していきたいと考えています。

それから、「核兵器の脅威」の部分は、なぜ核軍縮・核廃絶が進まないのかというところはもちろん、継続して検討していきたいと考えています。

また、「世界のヒバクシャ」についての展示がなくなるのではないかとのご意見もありま

したが、先ほどご説明しましたように、スロープの部分に写真を展示することを検討しています。最後に「長崎の歩み」のところだと、高校生の取組みだけではなく、長崎での平和活動の方々の取組みについて、ここできちんと展示していきたいと考えています。

いずれにしても展示の詳細については、今後検討を加えていき、審議会の皆様方のご意見をお伺いしながら決定していきたいと考えております。

委員

3点発言したいと思います。

まず1点目ですけれども、展示にあたっては、まずジェンダーを意識してほしいと思いました。というのは、私もよく館内ガイドの仕事をさせていただく中で、子どもたちから、特にCコーナーで、私たちがいない、と女の子から言われることが多いのですよね。意思決定に関わるポジションの方、平和活動をされている方、先ほど委員から3名のお医者様のお話がありましたが、3名とも男性ですよね。例えば2021年にお話をされた岡信子さん（2021年長崎平和祈念式典の際に、被爆者を代表し「平和への誓い」を発信）とか、女性で活躍された方々がいるのに、そういった方がいないということによって共感のチャンスが奪われているのではないかな、というのは自戒を込めて感じる場面が最近多いです。

2点目ですが、Dコーナーでは、例えば今の情報メディアコーナーでは、友の会の皆さんや市民団体の方々がお話をされることが多々あると思うのですが、現在の動線上では、そこにたどり着くのに、入館後の最後のときしか気づくことができません。その活動だけを見たいというときに、とてもアクセスしづらいな、というのを私も感じております。そういう市民の方々が発言する場面が、もしも今後ありうるのであれば、その動線設計についてはぜひ工夫していただきたいなというふうに感じました。そこは、市民とともに作り上げる資料館、というコンセプトにおいても重要だと思いました。

最後に3点目ですが、一つ目のアジェンダのところで委員が言われた点がとても大事だと思いました。子どもたちは体感することで気持ちが高まるということですね。展示については、何を见せるのかと同じぐらい、どう見せるかという、ハードではなくてソフトの部分ですね。実際にワークショップのフィールドワークでも多かったかなと思いました。フォントであったり、振り仮名であったり、爆心地からの距離とか、あと見出しをつけるとか、展示をどういうふうに工夫して見せていくのかということも基本設計の中に項目として置いてもらえるといいなと思いました。

会長

参考資料2の4-2に「世界の被爆者に関する展示（スロープ壁面）」というのがありますが、この世界の被爆者というのは、長崎原爆の被爆者だけなのか、核実験などによる被害者も含まれるのか。現在Cコーナーにある核実験の被害者の展示がどうなるのかがよくわかりませんでしたので教えてください。

事務局

基本的には現在Cコーナーにある「核兵器開発・実験の被害者たち」を想定していますが、

どこまでのヒバクシャを含むのかというのは、ご意見をお聞きしながら今後検討したいと考えています。

会長

核開発での被爆者、世界の被爆者と連帯するのは、大事なことだと思うので、引き続き検討してほしいと思います。

委員

先ほどの ABCC の話に関連する話です。城山小学校に原爆学級がありまして、『原爆学級文集』という冊子を 2018 年 3 月 10 日に同窓会で作りましたが、もう聞く方がおられないと。ぜひそういうことは資料館でしてほしいと思いますのでよろしくお願いします。

もう一つ、最初の審議会のときに、世界のリーダーが資料館を訪れたときの感想なり発言なりを資料館で見られるような発信を、という提案があったと思うのですが、これは今後デジタルサイネージなどで出していくことを検討されているのか、それだけ教えてください。

事務局

今のご意見に限らず、資料館だけですべて展示するのはスペース的にも難しい部分があります。今回は、現在 QA コーナーがあるスペースに、情報発信コーナー、メディアコーナーを設置して、いろんな情報をそこからとれるように充実させていく形で考えています。

委員

被爆遺構やその関連施設にどのようにアクセスしていったらいいかという、地図や地図付きの解説があれば観光客の方に親切かなと思います。

委員

被害のところで、内部被曝やいわゆる被爆体験者の話が出ていましたが、建物被害だとかそういう話ばかりだと被爆体験者が抜けてしまうという問題もあるし、それから岸田政権で状況が変わったというのもあるし、今朝の毎日新聞の長崎版で、被爆体験者からの聞き取りの記事連載が始まったので何回か続くと思いますし、そのことをすごく大事な問題だと思います。

それから、世界のヒバクシャの問題もあつたのですが、最近、NHKで実験開発のときのイギリス軍の、何も知らされないで実験を見ていたとか、そういう映像が出てきたり、映画が作られたりしていますが、それらは長崎・広島の被爆者の運動があつて、その成果として世界のいろいろなものが開示されてきているということがあると思います。最初のヒバクシャというのは、恐らくアメリカの核実験場でそばにいた人たちであると思いますし、そういうことを含めて世界の人に広く発信していくということが必要だろうと思っています。

歴史的なことについては、どのように展示していくのかということについては、やはり日本は加害の問題も含めて全部知っているけれども、それをここに展示しているけれども、それでも私たちは、核兵器は絶対になくしてほしいと思っているし、戦争はなくしてほしいと思っていると、そのような問いかけでないと力を持たないと思うので、そこはしっかりと表現してほしいと思っています。

委員

「核兵器の脅威」のタイトルがこれでいいのかと思います。ここは、ここを通過して行く人が、頭に自分の時間軸とあわせて考えていく大事な大項目だと思うのです。それを考えると例えば「核時代」の方がいいのではないかと。結論は出せないのですが。

もう一つ、「第一の、第二の、第三の核時代」という表現。さらに、第二の核の時代の「新たな核リスクの出現」という表現。表現としてどうなのでしょうね。「第一の、第二の、第三の核時代」という表現は講義などで使われるものなのではないでしょうか。一般に使ってもいい状況になっていますか。

委員

実は私、この区分があまり良くないなと思っていたのです。説明の際にはいいと思うのですが、コーナーのタイトルとしては、むしろ「なぜ核軍縮は進まないのか」でもいいくらいだと思います。その上で、その背景を説明すると。

この区分自体の展示というのはちょっとどうかな、と思います。それで、そのあたりを先ほど発言しました。

委員

意見というよりも確認です。今項目で出ているタイトルは、これをそのまま使う決定をしているわけではないということです。私が代弁することではありませんが、今日の段階では、あくまでも概念の紹介というところで、おそらく文言の詳細については今後の検討だと思います。

ただ、今後の審議会の中身を詰めていく上での関わり方について、おそらくここにいる皆様方は、私も含めて曖昧だと思いますので、最後の時間は、今後の説明をお願いします。どのように詰めていくのか、その正確性や文言といったところが問われている大事なプロセスだと思いますので。そのあたりが分かると皆さん安心して今日帰られると思います。

事務局

委員の皆様方のご発言通り、今の時点で決定しているものではないです。現段階は基本設計ですので、大まかなイメージ、ストーリーを決定していくということで、今こういった流れでお示しをしているところですので、ご発言をいろいろいただきましたので、そういうことも含めてもう一度このストーリーを決定していきたいと考えております。

具体的な中身については来年度の実施設計、ここで決めていくという形になると思いますが、事務局の方で実施設計案を作成し審議会の方にお示しした上で、ご意見いただきながら作成していきたいというふうに思います。ですから基本設計が今年度の完成を予定していますが、この項目については実施設計の段階で変更になるという可能性も当然あります。ですので、中身で何を説明していくのかというところで、項目名は変わっていくものと考えていますので、それについても審議会に説明、報告をしていきます。

事務局

終了します。